
星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

【Nコード】

N6068Y

【作者名】

梨

【あらすじ】

中高大学まであるマンモス校、星瞬学園。

その学園長の孫であり主人公の良一りょういちは、おぼっちゃま要素ゼロ、頭脳、容姿ともに平々凡々。

なんとか裏口で大学にもエスカレーター入学したが、巧みな学園長の計らい？で勉学に愛に笑いに生きる！

……はず。

1・1 寮とはどういふものかしら？（山田良一）（前書き）

処女作につき、至らない部分も多々あると思いますが、長い目でみていただけるとうれしいです。

どうぞ、よろしくおねがいます。

登場人物の大まかな説明は、文中に入れるつもりです。
わかりやすいように（ ）内に名前を入れました。

1・1 寮とはどういふものかしら？（山田良一）

「じいちゃんどういふこと！？」

学園長室で、学園長机をバシんとたたきながら良一は学園長がくえんちやうに問い
ただした。

どうやら激怒しているようだ。

しかし物語は、この激怒の前にすでに始まっていた。

『青春は、星の瞬く間の如し。
生徒、青春を横臥せよ。』

つまり、

学生時代は思いっきり遊べ

を校風にした、私立星瞬学園がこの物語の舞台である。

田舎と言つには嫌味に聞こえるが、都心からは小2時間の立地であ
る。

しかしながら、最寄り駅には特急はとまらず、そこから駅発のバス
を終着まで乗らなければがこの学園には着かない。

そのため、一部を除きほぼ寮生活が学園の主流である。中等部から
大学まであるにはあるが、大抵の者が檻から逃げるように大学は外
部で受験をする。

その実態は高校までは奔放な生活で進学できるが、大学はマニアックな学科ばかりの癖に、いきなりレベルが上がる。

そのため、学園の校風通りに青春を横臥して過ごした者たちは、学びを怠ると落ちてしまふのだ。

そして今年、学園長である山田善一やまだぜんいちの孫である山田良一やまだりょういちはこの学園の大学部に入学した。

良一は孫の中でもすこぶる無難であると一族では有名。

一いちとつくが、実は三男。

身長は173cmと男性平均と同じ。

痩せているように見えるが、実は筋肉がないため下腹のへこみが少々足りない。顔はまずまずの具合だが、散髪を怠るために長い髪が邪魔をして野暮ったい。

中学から学園生活で、服装にも無頓着ながらシンプルなものをおむためにまだ見られるという外見だ。

成績は可もなく不可もなく。

スポーツはやればなんでも様にはなるが、長続きがしない。

しかし性格は良いようで、なかなか周りを魅了するようだ。

学園長も、出来の悪い奴ほど……なのか、良一がお気に入りである。

しかし、そんな良一は、どう考えても大学への進学を手にする頭はなかった。

そう、つまり……

学園長に土下座をしたのだ。兄たちと違い、両親も自分には諦めている。

しかし、自分も男だ。

入学したら心を入れ替えて必死に勉強するので、入れて欲しい。それは、楽しさだけで過ごした青春をやり直したいと言う、良一とは思えない懇願だった。

学園長も（孫には甘い）男だった。

「良一は悔い改める必要などないよ。お前は私の理想に誰よりも従って生きてくれただけなのだよ。これはそのお礼だよ。」

と言って、入学を許可してくれた。

配属は、

人間環境学部 健康生活学科。

健康に生活するために、医学をはじめ栄養療法や運動療法を学ぶ学科で、望めば医療関係の資格をゴロゴロとれる学科だ。

全国でも初めての、学園長が考案した学科である。

男性はまだまだ少ないが、良一は気にせず

「俺がじいちゃんの健康を守る！」と、意気込んで残りの高校生活を横臥したのだった。

1・2（前書き）

『星瞬』は造語です。

実際にそついう言葉は存在しません。

さて、良一になにがあったかというところ、大学入学のために新しい寮へ行った際のことだった。

今年は稀にみる学園の人気ぶりに、4つの寮の収容人数を超えてしまい、臨時にマンションを改築し第5寮として使用する事となった。

良一には、その第5寮の最上階があてがわれた。

他の寮は、2〜4人で1部屋使用しているが、第5寮はマンションだったために六畳のワンルームではあるが1人1部屋という贅沢さであった。

また、食堂などの設備もなく、ベッド以外の家電や家具は自己負担のため、一定以上の家庭からしか第5寮には入れなかった。

中高と寮生活に慣れていた良一にとって、一人の空間の少ない実家は居心地が良くなり、寮の解放初日から引越す事にした。

さっそく荷物をほどこき、適当に配置すると早々にやる事が尽きた。

「暇だ……。じいちゃんどこでも行くかな……。そういえば手紙もらってたっけ。」

思い出したようにガサガサと荷物を漁って手紙を探し出し、読んだ。

良一へ

星の瞬く間の青春を横臥せよ。

お前の学園生活に幸あれ。

P・S・

サプライズプレゼントを用意したので、気に入ってくれると嬉しい。

自分でサプライズと言ってしまっただけはサプライズでは無いのではないかとつつこみを入れながら、良一は手紙を閉じた。

はて、手紙以外に渡されたものは無いはずだ。

他に封筒に入っていないし、手紙に細工がされているわけでもない。

悩んでいると、隣のドアの開いた音がした。

まだ入学式まで半月もあるのにせっかちな奴もいるなど、自分を棚に上げて考えながら、隣の音に聞き耳を立てた。

どうやら荷解きをしているようだ。

良一の部屋は707なので、方角的に706だ。

(手伝って、お礼にゲームでも借りるか。)

ちやっかり礼まで考えるのが良一らしいが、単に暇つぶしに遊び相手になってももらえればというのが本音だろう。

靴を履き、隣の部屋のドアに向かいチャイムを鳴らした。

はーいという声とパタパタと弾む足音に、数秒の事で疑問を感じながらも答えがでる間もなくドアが開いた。

ボタン

「キヤーツ」

「うわーっ」

開いたドアの先には可愛らしい女の子がいた。

見た目が問題なのではない、性別が問題なのだ。

「う、うめん！」

良一はなにを謝っているのかわからないまま、この場から立ち去りたい一心で部屋の方向へかけだした。

そして次の瞬間、何か黒いものにぶつかった。

どしんっ

「いたた……。わりい、前見てなかった。大丈……。ぶ、ぎゃーっ」

当たったのは黒装束に身を包み、数珠を持ったまたしても女の子だった。

どうやら勢いあまって自分の部屋より奥まで走って行ってしまったらしい。

しかし、今度は逆側へ走り出した。

性別が問題なのではない、見た目が問題なのだ。

そしてその足で、良一は学園長室まで全力でむかったのだった。

「じいちゃんどういうこと!?!」

来客への応対もできるよう広めに造られた学園長室に、良一が机をたたいた音が木霊した。

学園長としてではなく、1人のじじとして相手をする善一は、驚いた様子もなく、激走と激怒で息を弾ませて肩を上下させる良一をたしなめた。

「なにをそんなに怒ってるんだ。サプライズプレゼントと言っただろう。その様子じゃ、喜んでくれたようだな。やはり大学ともなれば、恋のひとつやふたつ……。いくらお前が奥手でも、同じ屋根の下で暮らしていれば自然と生まれるものだよ。なにより実証済みだ。」

善一の言葉に思考を巡らす。

そういえば、兄2人は大学卒業と共に結婚し、すぐに子供を授かっている。

良一は18にしてすでに3人の甥姪がいるのだ。

子供心に早すぎるとは思ったが、親族もそういった結婚が多く、家系なのだと思っていたのだが……

「兄ちゃん達もじいちゃんの仕業か。」

相変わらずホッホッホと気の抜ける笑い声を上げて、話を続ける。

「学生時代の恋愛は一生モノだと私は思っているよ。なにより人を成長させる。それに、いつまでもそんなじゃ、魔法が使えてしまう

ぞ？」

どこで覚えたのか、童貞のまま30歳を迎えると魔法使いになれるという都市伝説を例えに出して、良一が恋愛経験ゼロである事をさらっと言い放った。

さすが学園長、星瞬学園に負けぬ突飛な発想である。

まあ、その突飛な星瞬学園の創立者が彼であるのだが……

「ほっとけ！」

そう良一は言い放って学園長室を後にした。

「ああ、そうそう。ユウキ君も同じ階にいるから挨拶しなさい。あと、今日の夕食はうちに来る約束だぞ。成子せいこさんも楽しみにしているからな。」

成子とは、良一の祖母である。

良一は、ちゃんと学園長の言葉を最後まで聴き、強めにドアを閉めた。

ボタンという音が短く響き、残された室内にはホッホッホという笑い声だけが木霊していた。

しかし、これは学園長の策略の一部であることを良一はまだ知らないのである。

1 - 3 (後書き)

細々とした導入が終わりました。
次から登場人物の紹介です。

ちよこちよこ情報やタイトルを編集していますが、内容の変更はありません。

2 - 1 灰汁の強い新友（大塚祐樹）

おおつかゆうき
大塚祐樹は、今日からの新居である第5寮の自室のドアの前で考え事をしていた。

彼は大塚祐樹。

高すぎない長身に、細身ながら服の中になかなかの筋肉を隠している。

幼さは残るものの甘いルックスはもう大人の印象が強い。

成績優秀かつ、スポーツ万能。

まさに、天に愛された人物としか言いようがない。

良一とは幼なじみであり悪友だ。

周りから見ても釣り合いな2人だが、なぜかとても仲がよく、いつも一緒に行動している。

色々な説がささやかれているが、実の所は祐樹が真つ直ぐな良一に惹かれているのだ。

そんな祐樹は、中学から星瞬学園で生活していたが、他の学生と違い、送迎付きでの実家暮らしだったため寮生活は初めてである。

さて、そんな彼がなぜドアの前で立っているかといると、動けないのである。

いや、実際には動けるのだが、動きたくないのである。

なにが彼をそうさせるかというところ……熱い視線だ。

祐樹の部屋は708だが、709の住人と思われる人物がドアの間から顔を出してこちらを見ているのだ。

そしてぼそぼそと数を数えている。

「59 . . . 58 . . . 57 . . . 56 . . .」

(うわー……これストーカーかな。っていうか、これは呪いなのかな？SPもないし、動いて害はないのだろうか……下手に刺激すると怖いし……0になったらなにが起こるんだ？)

冷や汗をかきながら最善策を模索するが、今まで一人で行動することが少なかった祐樹には対処の仕方がわからなかった。しかし、その間も謎のカウントダウンは進んでいる。そしてついにその時は来た。

「3...2...1...0。ふふふっ」

不気味な笑い声と共に終了するカウントダウン。

なにが起こるのか、もう起こっているのか、祐樹にはわからない。勇気を出して動いてみようかと思った矢先、逆側から気配を感じた。

(召還獣か！？つまり生け贄は……俺なのか……)

なにやらひとりで盛り上がっているように見えるが、本人はいたってまじめである。

気配が祐樹の真後ろまで近づいてきた。

意を決して立ち向かおうと振り向いたその時、気配の主から肩に初手をくらった。

「よっ、祐樹。卒業式ぶりじゃん。っていうか、いきなり振り向くなよ。」

「良ーい〜……。」

気配の主は良一だった。

祐樹は緊張の糸が切れたように自分より身長の高い良一にもたれか

かり、ため息を吐いた。

「喰われるかと思った。」

「いや、俺そついう趣味ないし。っていつかとうとう祐樹も一人暮らしか。しかも隣じゃん。よろしくな！」

良一は、相変わらず若者特有の屈託のない喋り方で、祐樹に話しかける。

これがおぼっちゃまとして育てられた祐樹には、新鮮で心地よかつた。

「ああ、よろしく。」

今の祐樹には、良一はとても頼もしく写っていることだろう。

そんな2人の再会に、水を差すように声が聞こえた。

声の主は709の住人の様である。

か細いが、しつとしとべたつくような女性の声だった。

「見つけた。運命の救世主。」

「「ぎゃーっ」「

2人分の叫び声が、肌寒い空に木霊した。

2 - 2 (大林清子)

「申し遅れました。私、おおばやしせいこ大林清子と申します。今世で救世主にあえるなんて感激です。」

清子はそう告げると、ふふふっと湿った笑い声を上げた。

彼女はおおばやしせいこ大林清子。

漆黒の髪は跳ねはあるものの、肩胛骨がかぶるほどににまつすぐとのび、前髪は目がでるかでないかの微妙なラインで怪しさを増幅させている。

しかし、うつすらと見える顔はむしろ美人の部類にはいるだろう。真っ黒なロングワンピースからはえる手足は漂白剤につけたように白く、まだ3月というのに素足ではいているミュールが寒々しい。

さて、どこからつつこみを入れればよいのだろう。

良一と祐樹は顔を見合わせた。そもそも、どちらが彼女のいう救世主なのだろうか。

そしてなにを救えというのだろうか。

生唾をごくりと飲み込み、良一が代表して問うた。

「あの……初めましてだよね？俺、山田良一、んでこっちが大塚祐樹。救世主って何を救ってほしいのかな？こいつも用事が多いから、話だけなら俺が聞くよ。」

どうやら良一は、清子が祐樹を口説いているのだと解釈した。

もともと祐樹はもてるタイプで、逆ナンなどもしょっちゅうであった。

しかし、本人はあまり興味がなかったため、その女の子達を追い払うの

はいつも良一の役目であった。

きっと救世主様というのもその類の話であろう。しかし、始まってもない大学生活において、いきなりお隣さんといざこざを起こすわけにはいかない。

軽い自己紹介と共に救世主の意味を問うたその清子の答えに、2人はさらに驚いた。

「違います。救世主様は山田さんです。私の願いを……、叶えてくれる方が午後3時38分55秒にここに現れると、書いてあったんです。」

「ど、どこに?」

狙われているのが良一と分かり、祐樹も会話に参戦した。

「さっき……山田さんが私を押し倒していったときに……きれいなアザが出来ていたので占ってみました。そしたらね……、本当だった。やっぱり私の占いって、当たるんですよ。」ふふふつと笑い声は相変わらず湿っている。

初対面で、やっぱりと言われてもうなずくことは出来ないが、祐樹は良一の服をつかんだ。

「お前、本当に知り合いじゃないんだな。」

良一が首を縦に激しく振る。

「ああ、確かにさっきの事は悪かったと思っている。まさか救世主ってのはその仕返しなのかも……」

それを聞いて、裕樹はわなわなと震えた。

そして、祐樹は激怒した。

「初対面の女性を押し倒すなんて、見損なつたぞ！しかも青あざが出来るような汚し方……お前だけは信じていたのに。所詮お前も、俺の前だけの良い子ちゃんかよ！」

そして祐樹は熱かった。

拳を良一の頬目掛けて振り上げた。

もちろん良一は避けようとしたが、それが仇となって拳は鼻にヒツト。

避けた先の壁に後頭部をぶつけた。

生まれ持った石頭に助けられ、「痛い」で済んだのは不幸中の幸いだ。

常人ならば脳震盪くらいでは済まなかつただろう。

「いてて……おい、祐樹。お前なんか勘違いしてないか。確かにさつきは、慌ててたせいでぶつかつても謝らなかつたが、ここは新築のコンクリートだ。大林さんはひどく汚れてはいないはずだ……」

痛さに耐えながらぼつりぼつりと良一が説明すると、祐樹は把握したよう顔で顔を真っ青にさせた。そして謝ろうと口を開けた時、祐樹のよりも早く声が聞こえた。

「やめてー！その罪深い名で呼ばないで。神のいないただ広いだけの木々なんていらなわ。小さくても良いから森が良かった。森ならばきつと占い師としてももっと力を付けられた。いえむしろ今が林なのだから神がいない状態で……ブツブツ」

どうやら清子は、苗字が嫌いらしい。

清子は、ひざを突いて頭を抱えながら、ひたすらブツブツ……と自分を中傷するような、懺悔するような言葉を並べている。

時折聞こえるふふふつという笑い声が、痛々しい。

男2人は、さつきまでの喧騒はどこへやらと言った印象で、清子の対処に困惑した。そして、良一は先程ぶつかった件をまだ謝っていない事を思い出した。

きつと苗字がいけないのだという推論をもとに、今度は慎重に話しかける。

「さつきはごめん、清子。俺、真っ黒な服で数珠持ってるとか幽霊かと思ったんだ。なんか呪文も唱えてたみたいだし……よかつたら友達になってくれないか……な。」

良一の発言に、祐樹はどこから突っ込めばいいか迷っていた。

（女の子相手にいきなり呼び捨てかよ。それに言い訳かと思いきや、結構ひどいこといってないか。それに友達って……逆ナン相手に振り文句を言ったつもりでいるのか？）

結局、口を開閉させたただけでなにも言えず、視線を清子に向けた。すると清子は、さつきまで顔を覆っていた手で、コンクリートの床に『の』の字を書いていた。

そして、ちらちらと良一を見ながら湿りに照れの混じった声で囁いた。

「や、やっぱり占いは当たってたわ……。私の願い事がなかった。

……これからよろしくね。山田……く……ん。」

どうやら君付けを初めてしたようだ。

顔を真っ赤にし、瞳も潤んでいるようだ。

「おう、よろしくな。清子。」

たらしと言うより、女の扱いになれていないと思われる良一らしい返事である。

そして清子は、今度は視線を祐樹にかえた。

「私、初めてで2人もお友達ができるなんて、贅沢者ね。よろしく、大塚くんっ。」

よほど緊張していたのか、今度は鳴き声のようだった。

祐樹は、自分も巻き込まれていることにショックを覚え、口がきけなかった。

しかし、返事を聴くまで続くであろう清子の「よろしく」コールに、折れたのは祐樹なのだった。

2 - 2 (大林清子) (後書き)

解説などはなるべく文中に入れるつもりですが、わかりにくいことはつつこみを入れてくれると嬉しいです。

3月の4時過ぎといえば、日没も早送りなためにもう夕焼けだ。改築されたばかりの第5寮の壁も、橙に染まっている。その最上階の707号室に、3人の男女が座っていた。良一、祐樹、清子である。

ワンルームではあるが、3人ならばゆったりとくつろげるスペースはあるだろう。

しかしながら足を崩してくつろいでいるのは良一一人きりだ。

祐樹はカーテンのかかっている窓に向かって夕日を全身に浴びて、2人に背を向けている。

晴れやかな笑顔が逆に可哀相に写る。

清子は小さなテーブルに向かって正座をし、下向き加減にもじもじとしている。

時々、何も無いのにふふふっと湿った笑い声を上げている。思い出し笑いだろうか。

さて、この空気をどうしたものだろう。

中高生の頃と違い自由の利いた寮は、用意しなければ何も無いという不自由さを兼ね備えていた。

つまり、お茶菓子どころかお茶もない。

しかし、良一はこの後祖父母との約束があり、他2人も今日は下見だけで帰ると言うことで、買い出しに行くほどでもない。

3人は暇つぶし程度の時間を過ごす為に、良一の部屋に上がったのだ。

この手持ち無沙汰な状況をどう打開しようか、三種三様の思いで思案する。

ただ、内心一番焦っているのは、一番優雅に立ち振る舞っている祐

樹であることは間違いない。

「清子ってさ、占い得意なの？」

静寂した空気を変えたのは良一だった。

その問いに、清子は下向き加減の首をさらに下に落とす。

「じゃあ幽霊とか見えるの？この部屋にいる？」

どうやら良一は、占いと霊能の区別が付いていないようである。いつの間にかこちら側を向いている祐樹も、半ば呆れ顔だ。

「私は占いを生業としています。今はまだ学生ですが。どうしてもキャンパスライフに憧れていて……。邪心を抱き兼業などという重罪に手を染める私には、霊の世界のがお似合いですよね。まあ、霊の世界なんて私信じていないんですけどね。所詮、生き物は死んだら無に帰るだけなのだし。ということは、むしろ生命の誕生が神の成せるミラクル……。ブツブツ」

良一はまた清子の自爆スイッチを押してしまったようだ。

時折ふふふっという湿った笑い声が薄暗い室内によく似合う。

祐樹は、呆れ顔から引きつった笑顔に変わり、心の中で放つ言葉を探していた。

(霊は信じないのに神は信じるのか……。いやいやツッコミはまたスイッチを踏みかねないな。俺だって父さんの仕事を手伝っているよ？キャンパスライフに憧れているなんて可愛いね。……。うーん。)

思いつきはするが、声に出す勇気がない。

祐樹に近づいて来る女達と毛色が違いすぎるため、対応に困ってい

るようだ。

結局、こういう時は良一に任せた方が良いという結論にいたり、良一の発言を待った。

「じゃあどうやって占うんだ？」

良一は、あっけらかんと動じずに問うた。

初対面に見た目だけで逃げた者と同一人物とは思えない。要するに、ハプニングには弱いが、慣れるのが早いのだ。

「占いは……勘です。」

「はあ!?!」

思いがけない答えに、すつとんきよな声を上げたのは祐樹だ。

「私って、昔から勘が良いんですよ。何が見てるとその後の運命の一部がわかるというか……。本当に人は思いがけない特技があるものですね。」

ふふふつといういつも通りの湿った笑い声には誇りが混じっているように聞こえた。

場が和んだように思え、やっと祐樹も口を開くことができた。

「そういえば、さつきも神がいるとかいないとか言ってたけど、名前とかも関係するの?」

苗字という言葉をさけたのは祐樹なりの優しさだろう。

しかし、清子は目をカツと開き、震えだした。

その時、

「林と森の違いもご存じないのですか?最近の若者は……知らない

知識ばかり増えて母国の歴史に目を向けないとは何とも嘆かわしい限りです。そもそも、大の男2人がかりでか弱い女性を密室に連れ込んだあげく、質問責めとは……嘆かわしい限りです。」

ノックやチャイムもなしに突然入り込んだ男子高校生を、良一は知らなかった。

制服から星瞬の学生とわかるが、年上を若者呼ばわりするとはなんとも爺臭い男子だ。

「小森様……。」

どうやら、清子の知り合いの様である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068y/>

星瞬学園（愛と涙と笑いの青春）

2011年11月21日21時30分発行